

平成30年度第2回岐阜県総合教育会議 議事録

1 開催日時及び場所

平成30年9月14日(金) 13時40分 ~ 15時15分

岐阜県庁舎 4階特別会議室

2 出席者

知事 古田 肇

教育長 安福正寿

委員 稲本 正

委員 野原正美

委員 竹中裕紀

委員 近藤 恵里

(森口祐子委員は欠席)

3 関係者

各務原市長 浅野 健司

八百津町長 金子 政則

県立岐阜農林高等学校生徒 2名

4 オブザーバー

副知事 河合 孝憲

清流の国推進部長 兼山 鎮也

副教育長 内木 禎

5 陪席

清流の国づくり政策課長 辻川 和希

教育総務課長 平野 孝之

6 議事録

別紙のとおり

# 議 事 録

| 発 言 者                   | 発 言 内 容  |
|-------------------------|--|
| 清流の国<br>推進部長            | <p>これより平成30年度第2回岐阜県総合教育会議を開催する。</p> <p>本日は、1つ目として次期岐阜県教育大綱の策定、2つ目は、ふるさと教育に関する取組み事例として、ふるさと教育に熱心に取り組まれている各務原市長さん、八百津町長さん、また、ふるさと教育の実践例として、岐阜農林高校の生徒の皆さんに取組み事例を発表いただく。3つ目は、次期教育ビジョンの策定について説明し、その後、全体の意見交換を実施する。</p> <p>現在、県では、県の長期構想が今年度末で終期を迎えることから、次の戦略策定に向けて、「清流の国ぎふ」づくり推進県民会議に企画分科会を設け、有識者の皆さんにこれまで6回にわたるご議論をいただき、市町村長さんからも意見を伺った。その中で、特に教育、とりわけふるさと教育に関するご意見が多く寄せられているため、今回は、その取組み事例を紹介しながら、議論いただきたい。</p> <p>まず初めに、今申し上げた「清流の国ぎふ」づくり推進県民会議企画分科会における議論の状況について、私の方から簡単にご紹介させていただく。</p> <p>参考資料をご覧ください。</p> <p>今まで分科会を6回開催したが、5回までの議論を踏まえ、今週水曜日に6回目の分科会を開催した際に提出した、新たな清流の国創生総合戦略の柱立ての案である。</p> <p>企画分科会の中では、様々な意見をいただいたが、なかでも教育に関する意見が多く、人口が減少していく中で、岐阜県の未来を展望した時には、その担い手である子どもたち皆が岐阜県で活躍できるようにしていく必要があり、そのためには、「教育」こそが肝ではないかというのが皆さんに共通する認識だった。</p> <p>いただいたご意見を簡単に紹介させていただくと、小学校、中学校に加え、高校でもふるさと教育を実施して、地域への理解や愛着をさらに深めていくべきではないかというご意見があった。また、そうしたふるさと教育を推進していくのであれば、学校が地元企業や専門家などと連携して実施していくことで、教員の負担を軽減しつつ、より質の高い教育ができるのではないかとご意見もいただいた。他にも、農林業や製造業など地元の声を反映した産業教育の実施や、幼児期にどのような教育を受けるかによって差が出てしまうので、幼児教育の充実はもちろんのこと、幼稚園と小学校の連携・継続に注力していく必要があるのではないかといったご意見もいただいた。こうしたご意見を踏まえ、「参考資料」の戦略の政策の柱立ての1番目に「清流の国ぎふ」を支える人づくりを置いた。今後、戦略について更に検討を重ねるが、この教育大綱とも摺合せながら進めていきたいと考えている。</p> |
| <b>次期岐阜県教育大綱の策定について</b> |  |
| 清流の国づくり<br>政策課長         | 資料1、2-1、2-2により説明   |

## 取組事例のヒアリング

各務原市長

皆様のお手元に、資料3-1を配布させていただいている。

私どもが取り組んでいる「かかみがはら寺子屋事業2.0」をご紹介させていただく。寺子屋事業のこれまでの経緯は、目的としては、地域で活躍できる人材を育成するとともに、郷土愛を醸成すること。市長に就任して今年6年目を迎えるが、1回目の選挙の時から市長マニフェストに「子ども寺子屋事業の創設」を掲げ、平成25年度に市長に就任した翌年度から事業がスタートした。当初は、各務原ものづくり見学事業、そして、ふるさと歴史発見事業、基礎学力定着事業を行い、平成27年度以降には順次拡充している。そして、平成28年度に、2年間を振り返り、今一度コンセプトを洗い出しながら、しっかりした方針を立てて進めていこうということで、バージョンアップして2.0という数字を付けている。

寺子屋事業の定義としては、平成28年度から4つのコンセプトの下に、企業や地域にいらっしゃる有能な方々のご協力をいただき、地域の方々と共に作り上げる事業ということで、子どもたちの夢を育む事業としてバージョンアップし、今もなお継続あるいは拡大している。

資料には、遊び心を持って黒板の日直に「浅野健司」と書かせていただいたが、1つ目のコンセプトとして、やはり、夢・目標を子どもたちに持っていただく。夢や目標を持って成長してほしいという願い、そして、2つ目には「誇り」。これは、郷土への誇りを持って成長していただきたい。3つ目には「基礎学力」。基礎的な学力をしっかりと身に付けて欲しいという観点。最後4つ目には、いろいろな体験を通じて豊かな心を養っていただきたいということで、「豊かな心」。この4つのコンセプトを掲げ、いろいろな事業展開をさせていただいている。

この狙いと取組みについては、寺子屋事業を通じて地域全体が子どもたちと一緒に成長していこうという願いを込めている。地域の絆の強化を目指し、今もなお関わっていただいている関係人口というものが増えつつあるのではないかと認識している。この寺子屋事業については、どちらかという子ども教育という、教育委員会が主という感じを受けるが、庁内を横断するような横串を入れて全庁的に取り組んでいる施策である。学校に任せるといっただけではなく、民間企業あるいは地域ボランティアの方々など、多くの方々のご協力をいただき、子どもたちが参加できる体験学習の機会の充実を図ってきた。

今後の新たな展開は、地域にお住まいの方が、これまで学んできたことにより培った能力を地域の中で活かしてもらおうということで、人生経験豊かな方々が内に閉じこもるのではなく、外で得ていただいた、今までの経験上から学んでいただいたことを社会還元ということで、地域あるいは子どもたちにおろしていただくということで、そういった方々の力添えをいただいている。もうひとつには、子どもたちが寺子屋事業を通じ、職業観を育み、働くことへの夢、そして、憧れを抱いてもらおうということで行っている。地域で育った子には、やはり地域で就職してもらいたいということで、「地育地就」という言葉を掲げている。これは、教育委員会が発した言葉ではなく、産業活力部が設けた言葉である。そして、地域で育った子が地域で就職していただきたいという願いはあるが、やはり世界に羽ばたいていく子もいるだろうということから、地域での活躍だけではなく、各務原を想いながら世界で活躍できるグローバルな人材育成も同時に目指している。

寺子屋事業のロゴマークは、虫眼鏡で子どもの笑顔が見えるが、寺子屋のテンを虫眼鏡で見ると子どもの笑顔になっているというロゴである。

寺子屋事業の体系であるが、4つのコンセプトは先ほどお話しさせていただいた通りである。5つの柱として、1つ目は基礎学力定着、2つ目は福祉体験学習、これはここ近年、介護であったり福祉であったりの有効求人倍率が特に高いということから小さいうちからこうした体験をしていただくということで数年前に拡充の部分で入れた。そして、ふるさと歴史発見、今、岐阜県が、古田知事が力を入れていただいている地歌舞伎、私どもは村国座という国の重要文化財があり、そこで子供歌舞伎を毎年行っているの、こういったものも一つとして、ふるさと歴史発見事業としている。そして、ものづくり人材育成ということで、各務原はものづくりの街、工業製品出荷額等がここ18年間県内で1位、約7千億円の出荷額がある。ものづくりの街と言われていることから、ものづくり見学事業、そして、特にその中でも航空機関連の製品出荷額が高いということで、その分野の人材確保にも力を入れている。そして、地域とのふれあいということで、放課後子ども教室、夏休み子ども講座、そしてもう一つには、キャリアデザイン教育ということで、中学生の海外派遣事業も行っている。

個別の事業の説明となるが、基礎学力定着事業の中では、市内全小学校、全部で17校あるが、全ての小学校の3年生を主に対象とし、学校により4年生を対象としているところもあるが、小学校3年生で算数等、勉強で躓いてしまうとその後の学習意欲が湧かないといったデータが出ているので、まずは、小学校3年生を主なターゲットとし、週1~2回、学校の教室あるいは地域の方々のご協力を得て、さまざまな場所で地域の方々に指導していただいている。学校の先生は一切入っていない。地域の方、或いは、市内には東海学院大学、中部学院大学があるので、そこに通っている学生さんにも手伝っていただいている。参加児童は、17校で536名、講師としてご協力いただいている方は169名となっている。

同じような内容で、中学生の放課後学習室であるが、中学生全学年が対象となっている。塾に行っていない生徒を対象としている。年間40回、市内6箇所で行っている。昨年度は市内4箇所で開催していたが、今年度2箇所増やした。来年度は、市内中学校が8校あるため、8箇所を目指している。中学生になるので、若干勉強が難しくなるということから、教職員のOBや大学生に力添えいただき、生徒144名、講師の方22名で、各会場平均するとだいたい20名程度に参加いただいている。

ものづくり人材育成、特に、ものづくり見学事業と書かせていただいている。市内の小・中学生を対象に、小学生は5・6年生、中学生は全学年を対象としているが、児童の参加としては255名となっているが、受入れ側の企業の定員があるため、毎年約3倍の申込みがある。残念ながら行けなかった子については、6年生あるいは中学生になってからでも行けるような機会を作り上げているところ。

ご協力いただいている企業は、岐阜プラスチック工業(株)、ポテトチップスのカルビー(株)であったり、木材であったり、あるいは、航空機の関連、そして、自動車の関連等があるが、小学生については、このものづくり事業も6コース設定している。航空機、自動車、生活産業コース等々。参加した子どもたちにアンケートを取ると、ほぼ100%の子が「参加して良かった。」と回答している。そして、市内にこういうすごい企業があったんだということを知っていただく機会になったと思う。受入れ側の企業としても、比較的若い従業員の方が対応していただけることから、若い従業員の育成にもなったということ、そして、子どもたちの視点からということで、いいアイデアをいただいたといった感想もいただいている。年々、受け入れ企業も増えてきている状況。

|       |  |
|-------|--|
|       | <p>福祉体験ということで、児童生徒79名に参加いただいた。この中でも、自分自身が福祉用具の体験をするということはもちろんだが、高齢者の方々と接していただく機会も作っており、なかなか接する機会のない方々と接見するというので、子どもたちにもいい体験になっているとのアンケート結果が出ている。</p> <p>キャリアデザイン教育、これは、中学生の海外派遣となるが、通常は、中学生を海外に派遣するだけというイメージがあると思うが、航空機産業の盛んな街であり、川崎重工、飛行機を作っている会社がある。市内には、川崎重工の岐阜工場がある。そして、愛知県には名古屋工場がある。事前に語学研修、そしてプレゼン活動等々の研修を終えたのち、市内の中小企業を回っていただき、そののち、川崎重工の2つの工場を回っていただく。そして、そののちにアメリカへ派遣し、実際にボーイングの機体の最終組み立て工場まで見に行く。各務原市の企業が世界から見るとどの部分を作っているのか、世界に向けてどのような活躍ができてきているのかという連携、繋がりを持った中学生の海外派遣事業を行っている。そしてもう1点、市がアメリカ・シアトルにあるエバレットの中の2年生大学と連携協定を結んでいるので、大学にも行き、語学研修等を行っている。まさに市内企業が誇る製品についての学びというものを中学生の海外派遣事業で実施している。</p> <p>寺子屋事業の成長ということで、平成26年度からスタートしたが、平成27年度、28年度、29年度、今年度ということで、対象者やコース数、教室数を拡充し、寺子屋事業についてはどんどん成長させている状況である。その先は、一貫したものづくり人材育成ということで、小学生・中学生については先ほどの寺子屋事業で、今年度から、高校生についても市内の企業の見学事業をスタートした。大学生については、昨年度から航空関連のバスツアー事業を実施している。高校生については今年度、県内12校から33名に参加していただいた。見学は、川崎重工、コンタクトレンズのメニコン、そして、皆さん聞きなれないかもしれないが、日本一ソフトウェアというゲームソフトを作っているIT関連会社にお邪魔し、高校生にも市内企業を知っていただき、今後の進路選択にも活かしていただく。一旦は大学で外に出ても、市内の企業にはこういったところがあったな、ということ思い出していただけるように、今年度、小学生、中学生、高校生という流れを作らせていただいた。大学生については、市内の子のみならず全国各地へ案内させていただいている。定員40名に対し、今年度は72名に申込みいただいた。残念ながら、全員が全員参加できないので、41名という参加だったが、国内から14の大学、遠くは北海道、西の方では広島からも参加いただいた。</p> <p>最後に、「かかみがはら寺子屋事業2.0」は、10年後あるいは20年後、寺子屋事業に参加した子たちがこの各務原で住んで、就職していただけるような、時にはグローバルな人材になっていただきたいという思いで寺子屋事業をスタートした。そうしたことから、各務原市に見えない絆づくりというものを5年程前からスタートさせていただいたところである。</p> <p>以上で、私からの紹介を終わらせていただく。</p> |
| 八百津町長 | <p>八百津町の「ふるさと教育」についてご紹介をさせていただく。</p> <p>我が町では、八百津町で育った子に、三つの将来を望みたいと考えている。一つ目は、「八百津町に住み続け、地域に貢献しようとする」。二つ目は、「一旦は、八百津町を離れるが、やがて戻り、地域のために尽くす」。三つ目は、「将来、八百津町を出て、どこに住もうとも、ふるさと八百津町のことをけっして忘れない」ということ。子どもたちに世のため人のために尽くす、そのために夢・志を持たせ、それを描いた「夢・志」を実現するための努力をさせて</p>   |

いきたいと考えている。そこで、ふるさと教育の充実、実践として、「ふるさと」への誇りと愛着を大切に、地域と連携して「ふるさと教育」の充実に向けた「文化に触れる機会」地域の皆さんとともに行う体験活動や、歴史や文化財などを熟知してみえる方を、「地域の先生」として、学校で授業を行っていただいている。さらに、お茶摘み会などを通して「地域の人と関わる」交流活動にも力を入れている。

八百津町といえば、杉原千畝氏のふるさとである。そこで、人道教育の推進に力を注いでいる。「人道精神」は、杉原千畝氏を象徴する精神であり、現在そして将来に向けて、主体的に守り、引き継いでいく重要な精神であると考えている。全ての子どもたちに、杉原氏のように「温かい人間愛の精神」の心、人の痛みを理解し、人を思いやることができる心を育てることを重視している。

国際理解教育の推進も行っている。グローバル化により、国際感覚あふれる人材の育成が望まれている。そのため、小学校からの英語学習や、平成14年から、アメリカ、ワシントン、ニューヨークのホロコーストミュージアムを訪問し「人道精神」を学び、ホームステイも行って交流を深める中学生対象の海外研修も毎年行っている。なお、昨年からは派遣先をリトアニア、ポーランドに移し、交流活動を行っている。この海外研修には、延べ314名が参加している。平成28年7月、八百津町はリトアニア・カウナス市からイナ・プクリテ教育文化委員長をお招きし、友好交流に関する合意をした。これによりカウナス市から中学生が来町し、ホームステイをしながら様々な交流活動を行っている。

また、八百津小学校では、郷土の生んだ偉人杉原千畝氏の業績やその時代の歴史について学び、また人権について児童会で取り組み、「命・平和・勇気」の大切さを培うことを学校の使命としている。これをきっかけに文部科学省から人権教育推進指定校を受け、その発表の場として、平成18年から演劇に取り組み、現在まで児童約800名が演じてくれている。近年、岐阜清流プラザ支配人の演出家・プロデューサー小島紀夫氏に毎年ご指導いただき、創作劇「イエフダーと七つの灯」と題し上演している。昨年、一昨年は、花フェスタ記念公園、清流プラザでも上演させていただいた。参加した6年生の児童は、「千畝さんから学んだ人道精神、千畝さんの功績に誇りを持ち、あこがれている。大人になっても生かしていくこと、伝え続けていくことが私たちの責任である。」と話してくれた。今年の夏も、町内の小中学校及び高校の児童・生徒会の代表者が集まり「八百津町児童・生徒会サミット」が開催された。八百津高校生徒会の代表者による司会のもと、小中高校生が熱心に各校の人道学習について取り組みを発表した。

八百津小学校の創作劇、町内全小中学生の杉原千畝記念館見学、八百津中学校、八百津東部中学校の修学旅行先での杉原千畝氏に関する講話、交流、千畝氏が在籍した早稲田大学との合唱交流も続けている。ふるさとにゆかりのある杉原千畝氏を通して人道教育に励んできた結果だが、以前に比べて他人を思いやり、いじめを許さない生徒が育っていると感じている。

次に、八百津高校における「ふるさと教育のありがた」だが、八百津高校と連携している八百津中学校・八百津東部中学校が可茂地区連携型中高一貫教育をスタートさせてから15年目を迎えている。八百津町は、地元中学校との連携や高等学校への通学の便への配慮など、高校を町ぐるみで支援する体制を進めている。まず、地域文化への振興、八百津祭りへの参加であり、八百津町でも少子高齢化、人口減少があり、自治会単位では祭りが運営しにくい状況にある。そこで、この春の有名な八百津祭りに八百津高校の生徒が多数参加協力し、威勢よく大きな声を出して「だんじり」を曳く姿は地域住民を元気づけ、地域

|                      |   |
|----------------------|---|
|                      | <p>の文化振興にとっては頼もしい存在となっている。また、スポーツの振興についても、毎年開催の「海洋センターマリンスポーツ大会」、「人道の丘ジョギング大会」、「町民駅伝大会」などに八百津高校生の参加や運営支援、ボランティアとしての役割を發揮している。さらに環境美化活動の推進では、クリーン大作戦への参加、道路の清掃活動、産業文化祭のゴミ収集などの美化活動に取り組んでいる。</p> <p>続いて、連携型中高一貫校としての推進は、「中高の交流事業」の推進や「子ども同士の合同体験」、「中高が連携して社会人・職業人として、自立できるためのキャリア教育」などに力を入れている。八百津町の中学生にとって、「高校の教員が学習会を行ってくれるために、基礎学力がつくこと」、「高校生活をイメージできること」などの良さがあることも特徴である。</p> <p>小学校や保育園との連携も行っている。高校が小学校の児童を招き、高校生が先生となり、小学生の指導を行ったり、園児の保育なども行っている。その中で子どもたちはコミュニケーション能力も養っている。</p> <p>しかし、連携中学校以外の中学校出身者の中には杉原千畝氏の名前も知らない生徒も多く存在することも確かであり、昨年度は高校の現代社会の授業で杉原千畝を学んだ後、人権朗読劇を鑑賞し、人権講演会を開催するなど人道教育に取り組む機会を増やした。相互理解については、昨年度、長年の夢だった吹奏楽部のない八百津高校の硬式野球部の夏の岐阜県大会に八百津中学校の吹奏楽部が応援演奏を行った。さらに今年の夏は、八百津高校の音楽部の吹奏楽経験者も加わり応援に参加した。</p> <p>最後に、ふるさと八百津で取り組むキャリア教育、地域との連携を図りながら進めるデュアルシステム・企業実習を紹介する。希望する八百津高校の2年生はデュアルシステムに取り組む。デュアルシステムとは、「授業の中に企業、事業所での実習を取り入れ、学校で学ぶことと、企業で学ぶことを同時並行で行うシステム」である。このデュアルシステムは「就職」するためのものではなく、生徒たちが「就職後に職場で力を発揮するため」のシステムである。現在、2年生20名が実習先である20カ所の全てがふるさと八百津町の事業所で毎週木曜日、6時間、年間28回企業実習に取り組んでいる。3年目を迎えているこのデュアルシステムは、現在では可茂地区で広く知られるところとなり、地区内の中学校でも評価は高くなっている。これも八百津町に住む人々や事業主の皆さんの協力や支援があるからこそのことである。受け入れ先の企業・事業主からは、「このデュアルシステムは、八百津高校の生徒の育成のためだけでなく、受け入れた私たち自身の活性化にも繋がる。生徒の成長は将来の地域社会であるこのふるさと八百津の発展にも繋がる。」と評価いただいている。今後も八百津町、八百津高校、企業・事業主の皆さん方と緊密な連携をとりながら地域社会の期待に沿うことができる「ふるさと八百津」での人材育成に努めてまいりたい。</p> |
| <p>岐阜農林<br/>高校生徒</p> | <p>今お配りしたアイスは、岐阜農林高校で製造している「まくわうりアイス」である。少し時間を置いた方が美味しくなるので、発表後にお召し上がりいただきたい。</p> <p>これから、「伝統野菜まくわうりを活用した地域産業化へ向けた研究」についての発表を行う。</p> <p>岐阜県本巣市には、伝統野菜「まくわうり」がある。その歴史は古く、現在の岐阜県本巣市真桑という地域で収穫した瓜が非常に甘く、それを織田信長が朝廷に献上したことからこの名前がついたといわれている。しかし、現在その発祥地である真桑にはまくわうり農家は皆無である。そして、このまくわうりを知る人は世代が変わるにつれて少なくなっている現実がある。私達がまく</p>   |

|          |   |
|----------|---|
|          | <p>わうりに出会った時、他の作物にはない何とも言えない甘い香りに注目し、大きな可能性を感じた。私達は、この特徴を生かし、長年日本の歴史と共に歩んだまくわうりを守り、復活させることを目指している。</p> <p>これまでの取組みの1つ目は、まくわうりの特徴を活かした商品開発である。年間3万個以上販売される動物科学科の実習製品「岐農乳アイス」の10番目のアイスとして誕生した「まくわうりアイス」は、まくわうりの風味を活かした商品として、まくわうりの加工品の代表として地域で愛され4年間で2万個を販売した。このまくわうりの風味を活かしたアイスの製造方法を特許出願し、平成28年11月に無事特許を取得することができた。さらに、まくわうりアイスで学んだ技術を活かし他の加工品も研究開発。本巢市の「御菓子所吉野屋」と協力して開発したまくわうり大福は、年間を通じて販売され人気商品の一つとなっている。</p> <p>2つ目は、まくわうりを地域の人に知ってもらうための普及活動である。まくわうりの認知度向上や、イメージ改善、さらに地域全体での活用を目指した活動を行ってきた。最初に実施したことはポスター、のぼり、冊子やチラシなど販促物の作成である。これらはプロの手が入っているのではないかと勘違いされるが、全て私達の仲間や先輩たちが作ってきた。現在も、イベントでの配布や地域の店舗などでの掲示に活用されている。次に実施したのは、イベント運営。ターゲットや目的に応じて自分たちで考えたイベントを行った。その代表的なものは平成27年、28年に本巢市や樽見鉄道と協力して実施した「まくわうり列車」である。また、平成29年には地域の飲食店や商工会と協力して「まくわうりグルメフェア」も実施した。これ以外にも様々な取組みを行い、まくわうりの認知度向上やイメージ改善に大きく貢献できた。</p> <p>現在は、商品開発や普及活動にも力を入れているが、最も力を入れているのがまくわうりを飼料に添加した養殖鮎の研究である。近年、日本の養殖業界では地域の特産品を餌に与え、新しいブランド魚として展開する「フルーツ魚」と呼ばれる特産品が数多く誕生している。天然鮎に比べ、養殖鮎は風味が劣るとされているので、香りや風味が豊かなまくわうりを投与することで、新しい鮎が誕生し岐阜県の新たなブランドになるのではと考え、この取組みを始めた。</p> <p>学校に飼育施設を設置し、岐阜県水産研究所や岐阜県魚苗センターなどの協力でこれまで飼育実験を何度も行った。食味調査では、自分達だけでなく、川魚料理屋の料理人の方など、鮎に携わりのある方にも協力を依頼した。</p> <p>これまでの実験で、「まくわうりを加えた飼料を摂取した固体の内臓の苦味が軽減される」などの結果が分かった。今後はさらに研究結果を深め「まくわうり鮎」が岐阜県の新たな特産品となるような成果を出したいと考えている。</p> <p>真桑地区では年貢の代わりにまくわうりが納められていたという地域産業としての時代もあったが、現在は姿が消えつつある。この財産を私達の手だけでなく、多くの人の手で後世に残し、もう一度地域の産業化を目指したいと考えている。ふるさとの味を残すために、これからも活動を続けていく。</p> |
| 竹中委員     | 昔のまくわうりは再現できたのか。  |
| 岐阜農林高校生徒 | 昔からあった種が見つかったので、その栽培を続けている。   |
| 稲本委員     | アメリカなどで種の特許を取られてしまう前に、特許を取った方がよい。種の特許を取るためには、遺伝子を調べる必要がある。育て方で、無農薬などの   |



|                           |   |
|---------------------------|---|
|                           | 工夫はあるか。   |
| 岐阜農林<br>高校生徒              | <p>特許については、初めて聞いたので参考になった。</p> <p>栽培についての工夫に関しては、いま、私たちはまくわうり栽培研究会へ栽培の手伝いに行っているが、高齢の方が多いため、作業の過程である藁を敷く作業が力を必要とし、また時間がかかるため負担となっている。そこで、敷く藁をなくしてはどうかと提案し、今年度、一畦のみ、藁を敷かない試行を行っている。</p>   |
| 稲本委員                      | 肥料や、草を生やさないなど、改良の余地があると思う。温室で栽培しているのか。  |
| 岐阜農林<br>高校生徒              | まくわうり栽培研究会は露地栽培である。   |
| 稲本委員                      | 育て方によって、ますますブランド力が上がると思う。   |
| 知事                        | まくわうりアイスは販売しているのか。  |
| 岐阜農林<br>高校生徒              | 学校の直売所と、真正のおんさい広場等で販売している。  |
| 知事                        | 単価はいくらか。  |
| 岐阜農林<br>高校生徒              | 1個150円程度である。  |
| <b>次期岐阜県教育ビジョンの策定について</b> |   |
| 副教育長                      | 資料4-1、4-2により説明  |
| 清流の国<br>推進部長              | <p>意見交換に入る前に、本日ご欠席の森口委員から、事前にご意見をお伺いしているので紹介させていただく。</p> <p>学校教育や人材育成のあり方について、前回の総合教育会議の議論の中で自分の将来の方向性について中学生からの意識付け、動機付けが必要との意見が出ているが、中学生の精神的・身体的な成熟度合いに応じて行っていく必要があるのではないか。</p> <p>また、大学段階において、社会に出て役に立つ人間の育成のさらなる充実を図るべき。幼児教育については大変重要なので、引き続き幼児教育の充実を図るべき。</p> <p>ふるさと教育に関連し、郷土の自然や食について学ぶことは「生きる力」につながる内容であり大変重要。また睡眠をはじめとした生活習慣についてもその大切さを知る機会があるとよいのではないか。</p> <p>一方で、親からはふるさと教育よりも進学・就職に意識が向いており、そこにギャップがあることに十分留意する必要がある。</p> <p>教職員の働き方と質の高い教職員の確保の観点からは、やりがいをいかに持ってもらうことができるかがポイント。給与なのか勤務時間なのか仕事内容なのか、個人によって違うので、ニーズと照らし合わせながら、教職員の仕事</p> |

|      |  |
|------|--|
|      | <p>の魅力を高めていくべき。</p> <p>また、教職員のサポートとして、相談の仕組みも充実していくべきでないか。</p> <p>最後に、学校の環境整備については、近隣県と比較し、どの部分が充実しており、どの部分が足りていないのか、客観的にとらえた上で方向性を見極めるべきではないか。</p> <p>以上の意見をいただいた。</p>  |
| 意見交換 |  |
| 稲本委員 | <p>ふるさと教育といっても、学校の先生が岐阜の自然そのもの知らない。例えば、飛騨には飛騨山椒があり、ミカン科しか卵を産まないアゲハチョウが来る。アゲハチョウの脚には、人間の舌にある細胞と同じメカニズムがあるため、脚でつついてミカン科かどうか判断する。地元の人が知っているかといえば、地元の人でも地元への愛着がなくなっている。先ほどの岐阜農林高校の生徒も、魅力的なプレゼンテーションを行っていた。あれをもっと深めるような教育があると良いが、学校教育は型にはまっているため、一般的なことしかやらず、必ずしも郷土愛と結びつかない。地元がやれるかということ、そうでもない。</p> <p>逆に、都会の人が岐阜の山や清流に憧れや興味を持っており、地元の良さを発見し、地元の伝統と組み合わせていく。新しい視点で、自然の良さを認識する回路が必要。そうすれば、仮に岐阜の子どもが少なくなっても、外から人を入れることは可能。</p>   |
| 竹中委員 | <p>最近、人間力が弱まっているため、国も、これからの教育にアクティブ・ラーニングや考える力を取り入れてきている。国際的に戦っていく中で重要であるということ。</p> <p>地域を担う人材の育成についての要請がでてくるが、少子高齢化でもあるため、なかなかすぐに実現できるものではない。結局、愛着を持つ気持ちだけで、あとはグローバルに活躍してくれ、という書き方になっていってしまうので難しい。残ってくれる人と、世界で活躍する人と両方出てくる。</p> <p>各務原市のモデルの話は、なるほどと思った。「オール岐阜」という方向性が前から出ていたが、その事例の一つになると思う。</p> <p>ICTは、もっと強く打ち出した方がよい。先生の働き方改革にもICTを取り入れていく必要があるが、世の中は、10～20年でAIやロボットで劇的に変わってくる。農林高校でも、湿度管理や温度管理は、IoTやデータを使って管理されていくし、工業高校・商業高校もビジネスのやり方が変わってくる。本県は専門高校が強く、伸ばせる余地が大きいので、ICTを集中的に入れて特色を作るとよい。</p> |
| 野原委員 | <p>このところ、教育委員会では、採用試験の2次の合格発表に係る会議をさせていただいたが、毎年、教員採用試験の倍率がどんどん下がっている。人材が必要な時に、質の高い教員の採用を目指して取り組んできているにも関わらず、なかなか倍率が上がっていかない現実があるなかで、森口委員の意見にもあったが、人材を確保するためには、今までのやり方を変える必要がある。やりがいという点では、ふるさと教育がつながっていく可能性を感じた。地元で、ふるさとを愛する子どもたちを育てるための教員としてのやりがいというところに目を向けていただけるような先生が増えていくと更に良い教育ができていくのではないかと。倍率がなかなか上がっていかないのは</p>   |

|       |  |
|-------|--|
|       | <p>大きな課題だが、クリアするための抜本的な手立てが必要。岐阜県内の各市町村でふるさと教育には力を注いでいると思うが、これらが広がっていくことが一つの要因となると思う。素晴らしい発表を聞かせていただいた。</p>  |
| 近藤委員  | <p>森口委員の意見にもあったが、職業選択に関して、中学生が現場で体験を行うのは、私たちの時代にはなく、リアルにその職業を感じられる機会である。各務原市の話も素晴らしい。</p> <p>職業に対する憧れというか、良いイメージを持つこととの、バランスが難しいと感じる。福祉で言うと、大変さを知ってしまうと離れてしまうのではないか。私の実体験として、中学生の頃、先生方が楽しく働いている時代だったので、憧れて教員免許を取りたいと思った。今の教員離れは、「先生方が大変そうだ」と思われているのではないか。いろんな職業に対して、子どもたちが憧れを持って体験できるとよい。</p>  |
| 稲本委員  | <p>岐阜県の教育ビジョンは、明快に2～3つで良い。</p> <p>まずは、自然。ふるさとにつながる自然が豊か。清流は日本一だし、森林面積率も日本で2番。温帯で言うと、日本は、世界で最も森林の生態系が豊か。つまり、岐阜は、世界で最も水が清い地域である。世界一というのは魅力がある。これから水はどんどん汚れていくので、きれいな水のところへ行きたいということで、県外からでも学生や先生が集まる。</p> <p>もう一つは、AIなりICTだと思う。昔からもやってきているし、(県内には有数の)企業もある。だけど、残念ながら、今の小中高の先生は、レベルが低い。何が問題かということ、入試は欠点を見つけるもの。失敗しないようにするため、褒めない。日本の教育がいけないのは、褒めないこと。大坂なおみさんも、コーチが褒めている。褒める教育と地域の誇りは繋がる。誇りを持った先生と生徒を作れば、県外からも人は集まるが、そのためには、特徴を明確にする必要がある。県では既に「清流の国」を挙げているので、もう一つ挙げるとすると、AIかICTと思う。この2つを組み合わせると、そこを伝統が繋げる。そういう教育の骨子を仕切るのは、ビジョン策定委員会が出すべき。全般的にはよく出来てきているが、もっと刺さるアピールが必要。</p> <p>あと、教職員の教育。今の教員は、失敗しないことを学んできて、生徒にも失敗しないように教える。いま、時代はあまりにも変わりすぎており、安全対策だけではだめ。冒険しすぎればいいのかということそうではないが、教職員のパターンは偏りすぎているのではないか。チェックシステムがないと暴走してしまうから、悪いことではないが、チェックシステムだけだと、変化が大きい時代には魅力がなくなる。教員の中でも、変わった人、型破りな人が出てくるとよい。給料を上げられない以上、生きがいを持ってもらえない。</p> |
| 各務原市長 | <p>先ほど事例として各務原市の取組みを出させていただいたが、各務原市はものづくりの街であることから、今年度、高校生にも機会を設けた。県内各地42市町村で、各々ふるさと教育を行っているが、それが引き継がれるかということ、一旦途切れてしまうので、そこを繋げていくのが大事。高校生の市内企業の見学については、普通科高校あるいは工業高校の進学を目指す子に特定した。就職する子については、就職間近なため、今年度については、就職説明会を保護者の方に向けて実施。親と子のコミュニケーションを取れるように、親に対して関市と各務原市が合同で実施したが、関商工の場合は、45名、岐阜工業の場合は80名の保護者に参加いただき、関や各務原の市内企業の状況や有効求人倍率について知っていただき、企業ガイドブックを</p>   |

|       |  |
|-------|--|
|       | <p>お渡しし、保護者の方が知識を得た上でお子さんと話していただく機会を増やした。高校生になってふるさと教育が途切れてしまう。あるいは、親との会話が若干減ってきているところで、どう親さんが関わっていくか、ここが切れてしまうのがもったいないと思うので、各市町村の取組みがもっと面的に取り組めるとよいが、関と各務原でこんなことをやってみよう。情報として得ていただいた上で、今後に繋げていくと、高校で途切れてしまうところが継続できるのではないかと思う。</p>                                      |
| 稲本委員  | <p>寺子屋事業について、2つ抜けていると思う。一つは、学力の前に、各務原の自然のよいところを教える必要がある。</p>   |
| 各務原市長 | <p>自然については、「各務原手帳」というものを作成し、全小学校・中学校に配布し、授業にも取り入れている。</p> <p>地域の方々に入っていただきお話をさせていただくことを実施している。</p>   |
| 稲本委員  | <p>鰻でも鮭でも、生まれ育った川に戻ってくる。幼児期や小学校・中学校において、いかに地元が魅力的か教えることが重要である。</p> <p>もう一つは、地元の良さは、意外と地元の人には知らない。外国人や都会の人が来て「各務原が良い」というと、地元の人も良いと言う。</p> <p>この2つがあり、なおかつ、若者の何%かが良いという、一旦離れても戻ってくる。戻って来させるためには、仕掛けがいる。</p> <p>地元の良いものを忘れないように植え付けることと、外からの目で良いということを書いてもらう。それで地元は変わる。</p> |
| 竹中委員  | <p>子どもの起業家育成講座も行っているが、こういう機会は、学校ではなかなか作れない。寺子屋らしい精神が育成される取組みであり、素晴らしい。</p>   |
| 稲本委員  | <p>寺子屋事業にはこれだけの企業が揃っており、素晴らしい。</p>   |
| 各務原市長 | <p>企業の協力が必要なので、有難いことである。起業家育成では、生産から値段付け、販売まで、一連の流れで実施している。また、工業のみならず、商業、生活産業でも協力いただいているので、興味があるものを見に行く体制ができるのは利点である。</p>  |
| 竹中委員  | <p>こういうのをやろうと言ったら、みんな参画してくると思う。</p>  |
| 知事    | <p>工業会あたりにちょうど良いテーマではないか。</p>  |
| 竹中委員  | <p>子どもの新しい発想が出てくる可能性もある。</p>   |
| 稲本委員  | <p>若手の優秀な人をどう確保するかが課題。各務原だけでなく、県全体でやるとよい。人がいないところは潰れてしまうかもしれない中で、国内は人取り競争。海外の人を入れてすぐやれるかということそうではない。どのように人を確保するか。自然とAIをつなぐのはこの辺のところ。</p>   |
| 竹中委員  | <p>前回の会議で、クーラーの問題があったが、クーラーは、PTAが主体的に整備している。地域に支えられており、地域が目覚めたところは先に動いている。岐阜県の特徴として強く出していくべき。</p>  |

|       |   |
|-------|---|
| 稲本委員  | <p>杉原千畝記念館は、こんなすごい人が岐阜県から出ていたということで、すごく勉強になる。県内にどう生かすか、つなげる方法があるとよい。</p> <p>松下村塾は、小さな寺子屋から明治維新を起こした人間が出ている。吉田松陰が行ったことは2つあり、一つは、武士、農民を全て受け入れ、褒める。</p> <p>もう一つは、相手を平等化するため、「君」と呼ぶ。倫理観や差別をしないという考えである。</p> <p>教育と結びついてあれだけの人材を輩出したのであり、杉原さんともつながる気がする。学校教育と連携しながら、地域に根付いたものがでてくると良い。</p>   |
| 八百津町長 | <p>八百津町は、全ての学校に人道の部屋が設置してある。早稲田大学や名古屋の平和小学校との交流、中学生はリトアニアを訪問している。子どもたちへ人道教育を伝えることは、八百津町の悲願。何よりも、これからの子どもたちの生き方に大きな影響を与えるので、人道教育を更に進めていきたい。</p>  |
| 知事    | <p>八百津町は、大変国際交流が進んでいる。リトアニアと八百津町は、あれだけ離れたところで、しょっちゅう行き来している。そういう中でいろいろなことを学んでいる。</p>  |
| 稲本委員  | <p>具体的に海外の人と会うのは、国際感覚を磨くのによい。</p>   |
| 教育長   | <p>八百津町長さんと各務原市長さんの話を聞かせていただいたが、我々としても市町村の皆さんとの連携を深めていく必要があると考えている。</p> <p>各務原市長さんの仰ったことは、まさに我々の問題意識と同じで、資料4-2の課題に記載した。都市部の学校は地域との結びつきが弱いので、G1、G2で実施したような取組みを、各務原市との間で新たに展開できないか、考えていきたい。</p> <p>八百津町は八百津高校と密接にやっていた。引き続き、更に深めていただきたい。</p> <p>G1、G2では、市町村との連携に取り組んだが、3年経過し、非常によかったと考えているので、十分できていない高校、市町村については、新たに取り組んでいきたい。</p>  |
| 知事    | <p>いろんな事例を聞かせていただいた。</p> <p>ビジョンや大綱の方向付けをしていただく議論の中で、県の方も、地方創生の次の5年ないし10年の戦略作りを行っており、問題意識が合っていた方がよいと思い、冒頭にご紹介した。</p> <p>両方を通じて感じるのは、「清流」というコンセプトにたどり着くのに10年かかった。とはいえ、「清流」といえば、岐阜県らしさを全部説明してしまったような気になるのもいけない。あるいは、ふるさと教育をやっていえるならば、ふるさとを大切にしているかのように思うのもおかしな話である。</p> <p>森口さんが仰るように、他県や海外と色々な比較をしながら、客観的、具体的に掘り下げていく必要がある。</p> <p>稲本さんが仰るように、どこを掘り下げていくのか、もう一段議論が進む</p> |

|              |  |
|--------------|--|
|              | <p>とよいと思う。</p> <p>一方で、稲本さんの森や水について言えば、例えば、「清流長良川の鮎」が世界農業遺産になり、かつ、国連からは、世界農業遺産の中で最も内容のあるものだと言われている。世界に突き抜けていく何かがあるからこそその岐阜らしさであり、更に磨いて追求していきたい。</p> <p>関連して、「空宙博」、昭和村を衣替えした「ぎふ清流里山公園」は、爆発的に人が来て、爆発的に土産物も売れている。そういうものは、まだまだ足元にあるわけで、どう見つけて磨くか。次は関ヶ原だと思っている。順に磨いていくことで、岐阜らしさを具体的に追求していきたい。</p> <p>県内の高校野球の調子が悪いので、全国の高校で優れた成績を挙げている人にインタビューした。誰もが異口同音に言うのは、「岐阜県の選手は素晴らしい。しかし、教える人がいないので県外へ行ってしまふ。県外へ出て行って、それぞれの県で甲子園の代表になり、甲子園で同窓会をやっている。」と。やはり、先ほど大坂なおみさんの話もあったが、教える人、育てる人をどう育てるかが大事。採用倍率がどんどん下がっているが、大変だというイメージだけが先行しているようではいけないので、逆に、教える人も褒めてあげる必要がある。大坂なおみさんを教えているコーチの3つのポイントは、「ポジティブ思考」、「我慢」、「減量」。</p> <p>ビジョンや戦略は、どうしてもバランス重視となるが、どこにポイントがあるのか、岐阜でしかできないこと、岐阜でしか書けないことを盛り込んでいきたい。</p> <p>また、小中学校から高等学校への連携が書かれているが、幼児期から大学、社会人まで、全てに渡っての繋がり、シームレスで組み立てる必要がある。</p> |
| 清流の国<br>推進部長 | これをもって本日の会議を終了する。  |